



▲“第二の長堀”的な景観を見せる大甲橋上手左岸（新屋敷側）に姿を現した石垣造りの親水護岸

「治水」と「親水」両立を目指す

大甲橋上手左岸に“第二の長堀”

九州北部豪雨被害を受けて国土交通省では、平成15年度から龍神橋～八城橋間の「緊急対策特定区間」で実施中の河川整備に加え、24年度から「河川激甚災害対策特別緊急事業」で集中的な整備を開始。総事業費約350億円を投じ、28年度までを目処に流下能力を毎秒2000m³に引き上げる。

いつたん牙を剥けば恐ろしい白川だが、日頃はのびのびとした癒しの空間を市民に提供してくれる自然資産。治水と利水に主眼を置いた河川整備に、見を反映させる河川整備の手法が白川に新しい景観と機能を加えている。

川面に映る木々の緑が美しい大甲橋（明午橋間は「緑の区間」と呼ばれる）の視点が取り入れられ、地域住民の意見を反映させる河川整備の手法が白川

一方、川幅が狭く、ボトルネック部では、流下能力が毎秒約900m³と出水時には危険か所。学識者や地域住民の意見を取り入れ検討した結果、大甲橋上流左岸（新屋敷側）では、延長約600m、高さ約9mの石垣が姿を現した。川幅を拡幅し、流下能力毎秒2000m³以上を確保する一方、川べりの樹木約150本を移植し景観にも配慮。石垣護岸上と下に遊歩道を設け、広々とした親水空間を創出した。熊本

市では白川沿いの市道や国の河川管理道路を活用して、自転車でスマートに移動できる「白川自転車ハイウェイ（仮称）」構想も検討中だ。橋梁部分のスマートな通過に課題を抱えるが、「白川ハイウェイ」の実現は、通勤・通学や買物などで自転車活用に大いに期待される。

コンクリート護岸で固められた市民の視界外にあつた感の白川だが、実は足下に眠っている。新河川法による市の整備で白川の



▲親水護岸は延長約600m。石垣の上と下に遊歩道が整備される。地域住民の意見で樹木は護岸上に移植された



▲明午橋から上流の工事を望む（正面は子飼橋）。白川の形状で護岸の形も変わるが、自然石が使われ景観に統一感がある



▲熊本市が架け替え工事中の子飼橋。新子飼橋は4車線化される。下の明午橋も川幅拡幅で25年度から架け替え工事に入る



▲明午橋から上流の工事を望む（正面は子飼橋）。白川の形状で護岸の形も変わるが、自然石が使われ景観に統一感がある